論　文 ニダバ (*Nidaba*) 34(2005), 10-19

古典ヘブライ語動詞における語幹対立の様相

― 基本義に「働き掛け」の意味成分を持つ動詞の分析 ―

三　上　宗　一

0．はじめに

本稿は、特定の意味領域から若干数の動詞をサンプルとして選び、その動詞における各語幹間の差異について主として意味論的観点から検討を加えることを目的とする。

古典ヘブライ語動詞組織の語幹対立においては、文法的な態（使役、受動、再帰、等）や動作態 Aktionsart などの問題が複雑に絡み合っている [1]。特に動作態については、以前拙論(2004) でも指摘した通り、動作の結果が対象に及んでいるか否かという、いわゆる telicity の違いが各語幹間の意味的差異に深く関わっているように思われる動詞がある。

本稿では、この問題について考察するため、とりあえずの検討対象として(1)捜索・要求、(2)呼び掛け、(3)警告、の３つの意味領域に属する動詞を選び、さらにその中から２つ以上の語幹で用いられている動詞を検討対象とする。なお、これらの意味領域を選んだ理由は、どれも基本語幹が直接の影響を与えることなく何らかの働きかけを対象に対して行なう意味を持っているため、動作の影響が対象に到達しているか否かを各派生語幹ごとに観察し易いからである。

1．捜索・要求の動詞

1．1．בעה

[**Qal**(2): 尋ねる、問う．**Niph'al**(2): 探し出される] [2]

この動詞は出現箇所が少ない上にこれらの形をそれぞれ別個の動詞に属するものとして分類している辞書もあるなど [3]、語幹対立を見る上ではあまり適切な動詞とは言えない。

1)　ʾim　tiḇʿāyûn　　bəʿāyû　　šuḇû　　ʾēṯāyû
　　if　*you'll inquire*(Qal.impf.2.pl.m.)　*inquire*(Qal.imp.m.pl.)　do repeatedly　come
　　もしも尋ねるのであれば、尋ねよ。何度も来るように。(Is.21:12)

2)　ʾêḵ　neḥpəśû　　ʿēśāw　niḇʿû　　maṣpunâw
　　how　*were searched out*　*Esau*　*were searched out*(Niph.pf.3.pl.)　*treasures-his*
　　如何にエサウは探し出され、彼の宝は探し出されたことか。(Ob.6)

例文１は Qal の用例、例文２は Niph'al 語幹の用例である。が、少なくとも Qal 文と Niph'al

文がそれぞれ表わしている状況が動作態的に見て同一でないことは容易に見て取れる。なお例文２は七十人訳では以下のようになっている。

2′)　πῶς ἐξηρευνήθη Ησαυ καὶ κατελήμφθη αὐτοῦ τὰ κεκρυμμένα.

ここで נבעו に対応しているのは καταλαμβάνω *(overtake, lay hold of)* の受動形である。

１．２．בקשׁ

[**Pi'el**(222): 求める、見い出す、試みる、探す．**Pu'al**(3): 探される]

この動詞は今回取り上げた動詞の中では唯一強意語幹 (Pi'el, Pu'al) においてのみ用いられており、Niph'al や Hiph'il などのような接頭語幹での使用例はない。

3)　ûḇiqqaštem　miššām　ʾeṯ　yhwh　ʾĕlōhêḵā　ûmāṣāʾṯā
and-you'll seek(Pi'el.pf.2.pl.m.)　*from-there*　ACC　*YHWH*　*god-your*　*and-you'll find*
kî　ṯiḏrəšennû　bəḵol　ləḇāḇḵā　ûḇəḵol　naṗšeḵā
when　*you study-him*　*by-all of*　*heart-your*　*and-by-all of*　*life-your*
そしてお前たちはそこからお前たちの神ヤハウェを尋ね求めよ。その心を尽くして、そしてその魂を尽くして彼（神）を求めるならば、お前は（彼を）見い出すだろう。(Dt.4:29)

4)　ûṯəḇuqšî　wəlōʾ　ṯimmāṣəʾî　ʿôḏ　ləʿôlām
and-you'll be sought(Pu'al,impf.2.sg.f.)　*but-not*　*you'll be found*　*again*　*for-ever*
そしてお前は探されるが、２度と再び見い出されることはない。(Eze.26:21)

例文３にあげたのは Pi'el 語幹の用例であるが、この語幹は主に「探す、求める」の意味で用いられており[4]、例文４に見られるような Pu'al 語幹の「探される」という意味とは能動－受動の対立を構成していると見るのが自然である。なお Pi'el 語幹の用例を見ると、捜索対象の発見をその意味に包含している場合（「探し出す」）も、いない場合（「探す」）も両方存在している。一方 Pu'al 語幹は、出現頻度が少ないため断定はできないものの、用例を見る限りはその意味はあくまで「探される」であって、「探し出される」ではない。

１．３．דרשׁ

[**Qal**(155): 探す、求める、調べる、祈り求める、等．**Niph'al**(9): 探し出される、相談に答える]

この動詞の意味範囲は広く、特に能動語幹は多様な意味で用いられ得る[4]。

5)　bišnaṯ　hāʾarbāʿîm　ləmalḵûṯ　dāwîḏ　niḏrāšû
in-year　*the-fortieth*　*for-reign*　*of David*　*they were investigated*(Niph.pf.3.pl)
wayyimmāṣēʾ　bāhem　gibbôrê　ḥayil　bəyaʿzêr　gilʿāḏ
and-was found　*among-them*　*mighty men of*　*strength*　*in-Yaazer*　*Gilead*
ダビデの治世第４０年目に彼らは調査された。そしてヤゼル・ギルアドにおいて勇士たちが彼らの中から見い出された。(1Ch.26:31)

6) hălid̲rōš ʾōt̲î ʾattem bāʾîm ḥay ʾānî ʾim

INTERROG-*to-inquire*(Qal.inf.) ACC-*me* *you* *are coming* *alive* *I* *if*

ʾiddārēš lāk̲em

I'll be inquired(Niph.impf.1.sg.) *for-you*

お前たちは私に伺いをたてるために来たというのか。我が命にかけて、私はお前たちの伺いに答えることはしない。(Eze.20:3)

例文６の最初の用例では基本語幹 (Qal) が「神に伺いを立てる」意味で用いられている。転じて Niph'al 語幹の方は、例文５のように通常の受動の意味でも用いられるが、一方で特にエゼキエル書においては tolerative 用法でも用いられている。これは通常は主語が自分からあえて動作を受ける意味を表わす用法とされているが、例文６にもある通り意志的動作を表わしている点で再帰的用法に極めて近いものである。もしくは自動詞的意味で用いられていると見ることもできよう。とにかく主語の性質によって動詞の意味を受動的に解釈するか自動詞的に解釈するかは変わり得る。

Jenni(1968) はこの動詞の Qal と１．２節であげた בקשׁ の Pi'el 語幹とを比較し、その違いを目的語指向の結果相 objektgerichteter Resultativ と行為記述の動作相 tätigkeitsbeschreibender Aktualis の違いであるとしている。（ちなみにこれは特にこれらの動詞に限った主張というわけではなく、古典ヘブライ語動詞組織そのものについての彼の主張の基本をなす考え方でもある。）つまり דרשׁ の Qal が単に伺う、探す、探究するといった行為そのものをそれ自体として述べる意味であるのに対して、 בקשׁ の Pi'el 語幹は捜索対象に焦点を当てた、発見を前提とした上での「捜索する」という行為を表現していると Jenni は主張する。彼はそれを支持する根拠として、 בקשׁ の Pi'el 語幹が מצא (*find*) としばしば共起するのに対して、דרשׁ の Qal は מצא とはまれにしか共起しないという事実を指摘している。(pp. 248-249.)

Jenni の主張の正当性についてここで論じる余裕はないが、少なくとも非能動語幹（ Pu'al 語幹及び Niph'al 語幹を含む）の意味に関する限り、捜索対象の発見を必ずしも前提としていないのは、むしろ בקשׁ の Pu'al 語幹（例文４）の方である、ということは指摘しておいてもいいのではないかと思われる。

１．４．חפשׂ

[**Qal**(4): 調べる、探す、探し出す．**Niph'al**(1): 探し出される．**Pi'el**(8): （注意深く）探す、探し出す．**Pu'al**(2): 探される？、身を隠す？、謀られた？．**Hithpa'el**(8): 身を隠す、変装する]

この動詞には能動語幹として Qal と Pi'el の両語幹があり、ともに「探す」「探し出す」の意味を持つ。 Hithpa'el 語幹は再帰語幹として「身を隠す」の意味で用いられている。一方 Niph'al 語幹は１例のみではあるが通常は「探し出された」の意味で訳出されている。（七十人訳は ἐξερευνάω (*search out, examine*) の受動形を使用して訳出している。例文２’ 参照。）以下は Niph'al 語幹（例文７）及び Pu'al 語幹（例文８）の用例である。

7) ʾêḵ neḥpəśû ʿēśāw niḇʿû maṣpunâw

how were searched out(Niph.pf.3.pl.) *Esau were searched out treasures-his*

如何にエサウは探し出され、彼の宝は探し出されたことか。(Ob.6)（＝例文２）

8) baʿălōṣ ṣaddîqîm rabbāh ṯiṗʾāreṯ ûḇəqûm rəšāʿîm

when-exult righteous men abundant honour but-when-stand wicked men

yəḥuppaś ʾāḏām

is hidden(Pu'al.impf.3.sg.m.) *mankind*

義人が喜ぶ時、栄誉は増す。しかし悪人が立つ時、人は身を隠す（？）。

(Pr.28:12)

例文８は Pu'al 語幹の用例であるが、新共同訳を含む多くの現代語訳はこれを「身を隠す」として訳出している。しかしこのような再帰的意味を Pu'al 語幹が持つことは他の動詞ではほとんど例がなく、通常では考えにくい。現代語訳は恐らく上述の Hithpa'el 語幹 yiṯhappēś (יִתְחַפֵּשׂ) に読み替える解釈に基づいているものと思われる [5]。なお、参考までに七十人訳とラテン語ウルガタ訳を以下にあげておく。

8') διὰ βοήθειαν δικαίων πολλή γίνεται δόξα ἐν δὲ τόποις ἀσεβῶν ἁλίσκονται ἄνθρωποι.

8") in exultatione iustorum multa gloria regnantibus impiis ruinae hominum.

七十人訳では受動動詞 ἁλίσκομαι (*be taken, seized, conquered*) が用いられ、「人々は捕らえられる」と訳出されている。一方のラテン語では「人々の破滅（がある）」と、多分に意訳的な訳が付されている。

１．５．חקר

[**Qal**(22): 調査する、探る、探し出す. **Niph'al**(5): 突き止めるられる、測定される. **Pi'el**(1): （格言を）検討する]

基本語幹は主に「探る、探す」意味で、 Niph'al 語幹は「探し出される」の意味でそれぞれ用いられる。以下は２例とも Niph'al 語幹の用例である。

9) ʾim yimmaddû šāmayim milmaʿlāh wəyēḥāqərû

if are measured heavens above and-are ascertained(Niph.impf.3.pl.m.)

môsəḏê ʾereṣ ləmāṭṭāh

foundations of earth downwards

もしも上方で天が測られ、下方では地の基が突き止められるならば (Jer.31:37)

10) kî lōʾ neḥqar mišqal hannəḥōšeṯ

because not was measured(Niph.pf.3.sg.m.) *weight of the-copper*

なぜならその銅の重さは計り切れなかったからである。(2Ch.4:18)

この動詞の Niph'al 語幹は常に否定文か否定的な文脈で用いられており、丁度 tolerative 用法

での Niph'al 語幹がしばしば否定文においても用いられてことを想起させる。少なくともこの場合、単に「計られなかった」のではなくて、「（計るには計ったが）計り切ることができなかった（それくらい量が膨大だった）」と見るのが自然である。一方 Pi'el 語幹の意味は不明瞭である。

1．6．עתר

[**Qal**(5): 懇願する、祈願する．**Niph'al**(9): 懇願される、願いを聞き入れる．**Hiph'il**(8): 懇願する、祈願する]

この動詞の Hiph'il 語幹は基本語幹 (Qal) とほぼ同じ意味を持つ。対して Niph'al 語幹は通常の受動ではなく、「懇願を受け入れる」という意味で用いられている。これは דרשׁ と同様 tolerative 的な用法である。（例文１１の２番目の用例。）

11) wayyeʿtar yiṣḥāq layhwh lənōḵaḥ ʾištô
and-supplicated(Qal.impf.3.sg.m.) *Isaac* *to-YHWH* *on behalf of* *wife-his*
kî ʿăqārāh ʰhiʾ(ᵏhwʾ) wayyēʿāṯer lô
because *infertile* *she* *and-granted entreaty*(Niph.impf.3.sg.m.) *for-him*
yhwh wattahar riḇqāh ʾištô
YHWH *and-conceived* *Rebekah* *wife-his*
イサクは妻のためにヤハウェに懇願した。彼女が不妊だったからである。そしてヤハウェは彼の願いを聞き入れ、妻リベカは妊娠した。(Gen.25:21)

ここでの NIph'al 語幹をあえて「自ら懇願される」という風に無理に受動的にとることは適切ではない。あくまで「願いをかなえる」として自動詞的に解釈した方が自然である。

1．7．שאל

[**Qal**(163): 尋ねる、求める．**Niph'al**(5): （賜暇を）願う（？）．**Pi'el**(2): 尋ねる、物乞いをする．**Hiph'il**(2): 願いに答える、貸し与える]

この動詞の基本語幹 (Qal) には大別して「要求する」「質問する」の２つの意味がある。それに対して接頭語幹 (Hiph'il, Niph'al) は、いずれも要求された物（もしくは許可）を与える側、与えられる側をそれぞれ主語に据えた構文において使用される。

12) niśʾōl niśʾal mimmennî ḏāwiḏ lārûṣ bêṯ leḥem ʿîrô
asked?(Niph.inf.abs. + pf.3.sg.m.) *from-me* *David* *to-run* *Bethlehem* *city-his*
ダビデは私から自分の町ベツレヘムへ行く許可を求めた（？）。(1S.20:6)

13) wayyittēn yhwh lî ʾeṯ šəʾēlāṯî ʾăšer šāʾaltî
and-gave *YHWH* *to-me* ACC *request-my* *which* *I'd asked*(Qal.pf.1.sg.)
mēʿimmô wəḡam ʾānōḵî hiśʾiltihû layhwh kol hayyāmîm
from-him *and-also* *I* *lent*(Hiph.pf.1.sg.)*-him* *to-YHWH* *all* *the-days*

ʾăšer hāyāh hûʾ šāʾûl layhwh

when was he requested(Qal.passive part.sg.m.) *for-YHWH*

ヤハウェは私が願っていた要求を叶えて下さった。なので私も、彼がヤハウェに対して委ねられた者である限り、その全ての日々において彼をヤハウェに委ねる。(1S.1:27-28)

例文１２における Niph'al 語幹は、通常は「賜暇を願い求める」という意味で訳出されている。一方例文１３に出てくる Hiph'il 語幹 (hišʾiltihû) は「（願いに応じて）貸し与える」という意味であり、文法的使役において予想される「（第３者が誰かに）尋ねさせる、要求するよう仕向ける」というような通常の使役の意味での使用例はない。 BDB はこの Hiph'il 語幹の意味を "(prop. *let* one *ask* [successfully], *give*, or *lend*, *on request*, then) *grant*, *make over to* (as a favour, with or without request)" と記述しているが (p. 982) 、ここからも推測される通り Hiph'il 語幹の意味は（ Qal におけるような）単なる要求の時点から、その要求が実現された時点へと視点をシフトさせている。仮に Niph'al 語幹の意味を "*be granted*" （許される）であるとするならば、 Niph'al 語幹もこの点に関しては Hiph'il 語幹と軌を一にしている。

なお、この動詞の Pi'el 語幹は Qal と類似した意味（物乞いをする、注意深く尋ねる）で用いられており、上記の接頭語幹のような意味的派生はみられない[6]。

２．呼び掛けの動詞

２．１．זעק

[**Qal**(58): 叫ぶ. **Niph'al**(6): 集まる、召集される. **Hiph'il**(7): 召集する、叫び声を上げる]

基本語幹 (Qal) は専ら「叫ぶ」という意味であるのに対して、使役語幹 (Hiph'il) は「召集する」「叫ぶ」の両方の意味を持つ。当然ながら Niph'al 語幹の「集まる」意味は Hiph'il 語幹の「召集する」意味との対立において位置付けられるべきものであろう。

14) wayyizzāʿăqû kol hāʿām ʾăšer bāʿayir lirdōp

and-assembled(Niph.impf.3.pl.m.) *all of the-people who were in Ayir to-pursue*

ʾaḥărêhem

after-them

そしてアイルにいた全ての民が彼らの後を追うために集まった。(Jos.8:16)

ここでもやはり動詞の語義は Qal における単なる「呼び掛け」から、 Niph'al, Hiph'il における「（呼び掛けに応じての）召集」へと意味の成立時点がシフトしている。本来 Hiph'il は「使役」語幹として文法上は記述されているが、この動詞のように単純な文法的使役の意味とは異なる派生義で用いられている例も決して少なくはない。

２．２．צעק

[**Qal**(47): 叫ぶ. **Niph'al**(6): 集まる、召集される. **Pi'el**(1): しきりに叫ぶ. **Hiph'il**(1): 召集する]

この動詞は語源上は上述の זעק と密接に関連している。用法もほぼ זעק に準じて考えてよい。以下は Pi'el 語幹の用例である。

15) wəhû <u>məṣaᶜᶜēq</u> ʾāḇî ʾāḇî reḵeḇ yiśrāʾēl
and-he was calling repeatedly(Pi'el.part.sg.m.) *father-my* *chariot of* *Israel*
ûpārāšâw
and-horsemen-his
そして彼は「我が父よ、我が父よ、イスラエルの戦車よ、そしてその騎手よ。」と<u>しきりに叫んでいた</u>。(2K.2:12)

ここでもやはり Pi'el 語幹には接頭語幹におけるような意味的派生は見られない。

2．3．קרא

[**Qal**(669): 呼ぶ、叫ぶ、読み上げる．**Niph'al**(62): 呼ばれる、呼び集められる．**Pu'al**(7): 呼ばれる]

この動詞は単に「（名前などを）呼ぶ」「叫ぶ」の意味でも用いられるが、他にも「呼び集める」、「召集する」意味もある。対応する Niph'al 語幹にも「呼ばれる」「召集される」などの意味があるが、一方で זעק などと異なり Hiph'il などの使役語幹は存在しない。

16) ʾăšer <u>yiqqārēʾ</u> ᶜālâw məlōʾ rōᶜîm
where *are called together*(Niph.impf.3.sg.m.) *against-him* *full of* *shepherds*
羊飼いの一団が彼に対抗して<u>集められても／集まっても</u> (Is.31:4)

例文１６は Niph'al 語幹の用例であるが、受動ないしは再帰の意味で用いられている。

3．警告の動詞

3．1．זהר

[**Niph'al**(8): 警告される、警告に留意する．**Hiph'il**(14): 警告する]

この動詞には基本語幹の使用例がなく、接頭語幹のみで用いられている。

17) wəʾattāh kî <u>hizhartô</u> ṣaddîq ləḇiltî ḥăṭōʾ ṣaddîq
and-now *when* *you warn*(Hiph.pf.2.sg.m.)*-him* *righteous* *not to* *sin* *righteous*
wəhûʾ lōʾ ḥāṭāʾ ḥayô yiḥyeh kî <u>nizhār</u>
and-he *not* *sinned* *he'll be alive* *because* *he accepted warning*(Niph.pf.3.sg.m.)
あなたが善人である彼を、その善人が罪を犯さないように<u>警告し</u>、彼が実際に罪を犯さなかったならば、彼は生き延びるであろう。彼が<u>警告を受け入れた</u>からである。(Eze.3:21)

Hiph'il 語幹は単に「警告する」という意味であり、相手がその警告を受け入れることは必ずしも語義成立の必須要件ではない。それに対して Niph'al 語幹は「警告を受け入れる」という意味でも用いられており、単に警告されただけでは nizhār の意味が成立するとは限らない。実際エゼキエル３３章２～４節には、見張りが警告した (hizhîr) にもかかわらず人が警

告を受け入れなかった (lōʾ nizhār) 場合について記載されている。（実例省略。）なおこの動詞の Hiph'il 語幹は、相手が働きかけ（この場合は警告）を受け入れるか否かにかかわらず成立する、いわば atelic な意味を持っている点で שאל や זעק などの Hiph'il 語幹と異なり、どちらかといえば Qal 的である。この動詞に Qal 語幹が存在しないのは、この点から見る限りはむしろ自然なことであるかもしれない。

3．2．יסר

[**Qal**(3): 教える、指示する．**Niph'al**(5): 矯正される、矯正を受け入れる．**Pi'el**(32): 矯正する、教える．**Nithpa'el**(1): 矯正を受け入れる．**Hiph'il**(1): （？）]

この動詞の能動語幹は Qal と Pi'el であり、ともに非接頭語幹である。対する Niph'al 語幹はここでもやはり「矯正を受け入れる」意味である。

18) yissartanî　wāʾiwwāsēr　kəʿēḡel
you chastised(Pi'el.pf.2.sg.m.)-*me*　*and-I was chastised*(Niph.impf.1.sg.)　*like-young bull*
lōʾ　lummāḏ
not　*tamed*
あなたは私を懲らしめ、私は飼いならされていない子牛のように矯正を受け入れた。(Jer.31:18)

最初の動詞が Pi'el 語幹の、2番目が Niph'al 語幹のそれぞれ使用例である。（Qal については実例省略。）

なお Jenni(1968) によると、この動詞の Qal は（矯正という）行為そのものを意味しており、聞き手の側にその行為の結果が及んだかを問題にしていないのだという。それに対して Pi'el 語幹は、目的語にその結果が及んだものとしてとらえられる。(pp.217-218.)ちなみにこの動詞では（ זהר とは異なり） Hiph'il 語幹がほとんど使用されていない。唯一の用例も実際には問題例であり、本当に Hiph'il 語幹であるのかどうか疑問である。一方 Nithpa'el 語幹に関しては、用法上はほぼ Niph'al 語幹に準じて考えることができそうである。

4．まとめ

今回は意味領域を限った上での考察だったため、一般的な結論を出すことは差し控えたい。いくつか観察できる点を指摘するにとどめる。

1．Niph'al 語幹を含む受動語幹については数が少ない上、翻訳や文脈に頼らざるを得ない用例も少なからずあり、断定的な結論を出すことは差し控えたいが、少なくとも捜索の動詞に関する限り、 Niph'al 語幹の主語は単に「捜索された」ものではなく、「（捜索の結果として）発見された」ものとみなし得る例がほとんどである。一方他の受動語幹、特に בקש の Pu'al 語幹などはあくまで「探された」という意味でしか使用されていない。呼び掛け、

警告の動詞の Niph'al 語幹に関してもほぼ同様である。

2．Pi'el 語幹を主に用いる動詞は以下のようである。（Pu'al 及び Hithpa'el は省略。）

	Qal	Niph'al	Pi'el	Hiph'il
בקשׁ			*ask, request, search for*	
חפשׂ	*search (out), examine*	*be searched out*	*search carefully*	
יסר	*instruct*	*let oneself be instructed*	*chastise, teach*	?

このうち Jenni (1968) が最後の יסר の Pi'el 語幹に関して「目的語指向の結果相」であると主張したことについては既に述べたが、同様の結論を今回検討した他の動詞の Pi'el 語幹にまで適用できるかどうかについてはよく分からない。動詞によっては、今回 Hiph'il 語幹において見てきたような telicity に関わる意味論的性質と、Pi'el 語幹における（Jenni が主張したような）結果指向の意味論的性質とが衝突することもあり得る。今回検討した動詞において Pi'el 語幹と Hiph'il 語幹の両方で使用される動詞が少なかったのも、もしかしたら一方が他方の成立を阻害したためかもしれない。

3．考察対象動詞のうち Hiph'il 語幹を持つものを列挙してみると、以下のようになる。

	Qal	Niph'al	Hiph'il	Pi'el
זעק	*cry out*	*be summoned, assemble*	*summon, call out*	
שׁאל	*ask, demand*	*ask for leave(?), be granted(?)*	*lend, grant*	*inquire, beg*
עתר	*supplicate*	*grant entreaty*	*supplicate*	
זהר		*be warned, heed warning*	*warn*	

通常 Hiph'il は「使役」語幹として記述されるが、単純に基本語幹の使役として記述できるものは上記の動詞の中には１つも存在しない。具体的には個々の用例ごとに統語関係まで含めて詳しく検討してみないと断定的なことは言えないが、少なくとも項の数を１つ増やすといった単純な統語論的操作だけでは個々の用例をうまく記述・説明できないことは確かである。むしろこれらの接頭語幹は統語的な項目数ではなく、動作や出来事そのものの意味論的性質（ telicity も含まれる）を変化させる方向で機能を発達させてきたのかもしれない。いずれにせよ今回検討した זעק や שׁאל におけるような接頭語幹の用法は、Hiph'il 語幹の主機能を「動作使役」として記述する従来の分析だけでは十全に説明できたとは言えず、今後さらに詳細な分析が必要である。

注

1．Waltke & O'Connor (1990) は Niph'al 語幹の主な機能を(1) middle, (2) passive, (3) adjectival, (4) double-status (reflexive, benefactive, reciprocal, tolerative, causative-reflexive) のように分類し、そこから medio-reflexive という基本機能を抽出している。一方 Pi'el 語幹については従

来から強意もしくは使役語幹として記述されてきたが、 Jenni(1968) はこれを Faktitiv もしくは Resultativ として Hiph'il 語幹の Kausativ の意味と明確に区別している。彼によれば Pi'el 語幹の基本義は（ある動作によって引き起こされた結果としての）状態を（その過程は問題にせずに）対象に対してもたらすことであり、出来事を引き起こす動的な意味を持つ Hiph'il 語幹とは微妙に性質が異なる。

2．語幹ごとの出現数は Even-Shoshan(1993) を参考にした。

3．cf. Even-Shoshan (1993) p.194.

4． Jenni(1968) は בקשׁ の Pi'el 語幹を "*suchen = ausfindig machen, nach etwas trachten, sich zu verschaffen suchen, fordern, bitten, jm. befragen*" として、また דרשׁ の Qal を "*suchen = sich kümmern um, studieren, nachfragen, gründlich untersuchen, einfordern, auf etwas bedacht sein, sich fragend oder bittend an jm. wenden*" としてそれぞれパラフレーズしている。 (pp. 248-249.) 捜索の意味の動詞に関しては Westermann(1960) も参照のこと。

5．cf. Koehler & Baumgartner (1994) Vol.1. p.341.

6．ただし、ここでは通時的な意味的派生を必ずしも想定していない。何が基本義であり何が派生義であるかを決定づけるのは容易ではない。

参考文献

Bergsträsser, Gotthelf (1928) *Einführung in die semitischen Sprachen - Sprachproben und grammatische Skizzen*. München: Max Hueber Verlag.

Brown, Francis., S. R. Driver & C. A. Briggs (1907) *A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament*. Oxford: Clarendon Press. ［本文中では BDB と略記］

Even-Shoshan, Abraham. (1993) *A New Concordance of the Bible*. Jerusalem: Kiryat-Sefer.

Jenni, Ernst. (1968) *Das hebräische Pi'el. Syntaktisch-Semasiologische Untersuchung einer Verbalform im Alten Testament*. Türich: EVZ-Verlag.

Koehler, Ludwig & Walter Baumgartner (1994-1999). *The Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament. I - IV*. Leiden: Brill.

三上宗一 (1999) 「古典ヘブライ語ニファル語幹の機能について　ー主語の意志性の観点からー」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』第２０巻. pp.251-267.

三上宗一 (2004) 「古典ヘブライ語 Niph'al 語幹の Reflexive 用法及びその関連用法についての分析」 *NIDABA*. Vol.33. pp.119-128.

Waltke, B. Bruce. & M. O'Connor (1990) *An Introduction to Biblical Hebrew Syntax*. Winona Lake: Eisenbrauns.

Westermann, Claus. (1960) "Die Begriffe für Fragen und Suchen im Alten Testament". *Kerygma und Dogma*. Vol.6 pp.2-30.

（紙幅の都合上一次資料並びに翻訳に関しては省略する。）